

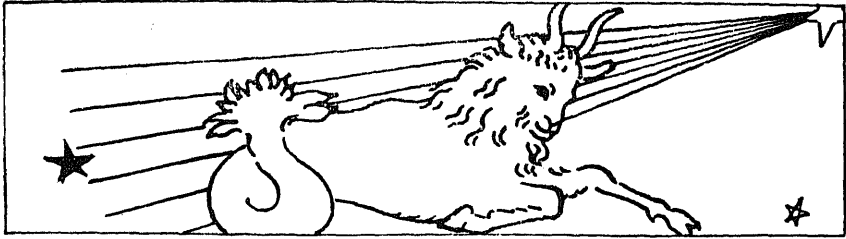
幼見之教育



號五第 號月五 卷三十四第

內校學靈師等獨子女京東

會協國稚幼本日



第 五 號 幼 兒 教 育 の 幼 兒 卷 三 十 四 第

— (次 目) —

明治天皇御製謹誦……………倉橋惣三(一)

諸方面よりの躰

躰の教育理論……………倉橋惣三(三)

我が國の武士の躰……………石川謙(五)

始めの躰……………清水光子(九)

本をみる躰……………志村貞子(二)

遊戯による躰……………古澤靜子(四)

お畫かき・お仕事の躰……………上遠文子(七)

國民學校より幼稚園にのぞむ……………前田四郎(一九)

科學的芽生えを重んずる遊びのいろ／＼(二三)……………岩松多吉(三)

中支の一隅より……………福山隆(二五)

おま／＼ご／＼動物園—誘導保育—……………東京市東郷幼稚園(二六)

入園の喜び……………櫻井勝三(二七)

幼兒の母……………(元)

幼稚園と母の時間—幼稚園から—我子の性質(倉橋惣三)—お氣をつけて下さい、お家の

中でのお話を(山村きよ)—幼兒向圖書

保 育 奉 公

大 東 亞 戰 爭 必 勝 完 遂

明治天皇御製

母が手にひかれてあゆむうなるこのたちごまりては董つむなり

この春の野で、畏くも御目にままつた情景であらうか。光榮の母よ、光榮の子よ。春光ゆたかに充ちて、あかるくもあたゝかい霞と陽炎の中に、うつかりうつまされてゐる母子馳蕩の畫面である。われらも亦うつかり、そのうちに溶け入らせていたゞくばかりである。

たゞ、またしても詩になりきれぬ、さかしらの想ひを、そこに挟ませていたゞくすれば、自然に對する幼兒の強き興味、それを満足させてやらうとして、わざ／＼手をひいて共に歩む母の心を、幼兒教育者として考へずにはゐられないのである。この御製と同じ春に

をさな子につませまほしと思ふかな董花さく庭をめぐりて

の御製を謹誦し奉る。幼稚園では、觀察の名に於て、幼兒に自然を與へることをすゝめられてゐる。その教育的意義に就てはいろ／＼の理がある。しかも、幼兒の心が如何に強く自然に惹かれてゐるかを先づ察することなしに、幼兒の自然觀察をほんたうに導くことは出来ない。自然を與へてさう教育しようといふ前に、先づ自然を與へてやりたい心、これを離れて、保育としての觀察は生きない。

それにしても、この母は、たゞ手をひいて我が子を野に連れ出したゞけであらうか。立ちごまりては、よろこびに目を輝せて紫の董を描むわが子を、さう導いて摘ませてゐるのであらうか。手をひくだけで心を導かなかつたら惜しい。——同じく美しい畫面も、いろ／＼に描いてみるこゝが出来る。

(倉橋惣三謹誦)

諸方面よりの躰

躰の教育理論

——その基本的理解のために——

一、躰の意義

二、躰の歴史

三、幼児教育の場合

四、躰の内容

五、躰の作用

六、躰の教育的成果

一 躰の意義

子ぎもの成長は、或る意味に於ては自然である。内なる自然の力によつて、自然の發達法則に従つて、なるようになつてゆくのである。そのなりかたはいろ／＼であるが、成長の常態としては、生育であり、増大であり、強加である。そこに自然價値の發展を認めることが出来る。若し子ぎもが單に自然物であるならば、それはそれでいゝであら

う。

しかも子ぎもは、自然界のものではなくして、人間社會のものであり、人間文化界のものである。社會と文化界との間に影響せられつゝ、社會の一員となり、文化價値の所有者となるのである。社會の一員となることなしに一人前になれないし、文化價値をもつことなしに、生き甲斐もない。而してそれは自然のまゝの成長だけでは得られないことである。

社會と文化とは、自然そのものではない。従つて、自然に對しては、それ／＼の規範を以て臨むことになり、規範的に律することになる。即ち成長が自然のまゝに任せられないで、社會と文化との規範を以て律せられてゆくところに、躰けがある。

この意味に於て、躰は社會的文化的のものであると共に、外からの他律性のものである。前者に躰の内容的力が存し、後者に躰の形式的力が行はれるといへる。いづれにしても、躰は、なるようになるのに比して、強要性のこゝである。

同じく強要性のこゝであつても、内容的の方面と形式的の方面とでは、その強要に別がある。社會的、文化的のこゝは、自然そのものでないこゝは言ふまでもない。従つて、既成の規範として自然に對するのであるが、しかし又考へてみるに、人間がもつ社會的、文化的のものは、人間からつくられたものである。人間本性以外のものではない。すなはち、既成の規範としては、人間の自然性に對し、殊に未成の幼少者に對し、全く別のものとして外にある如き隔りをもつであらうが、その本質に於ては、必ずしも全く別のもの、外にのみあるものではない。そこには、本來の一致性、こゝよりも、寧ろ共通性といつていゝものが存在してゐる筈である。この點で、社會的、文化的規範は内容的には、子どもの中にある人間の自然性に對して、ただ外からの力としてのみはたらくものでもないといふ見られる。教育は人間を對象としてゐるこゝで、その躰も亦、人間でない自然——植物や動物——を型づけてゐるのこゝはちがふ事實である。躰の内容力にはこの特色が考へられずにあるない。

これに對して、形式的力としての躰は、全く外からの作用であり、強要そのものであり、強制的に他律せられるこゝである。この場合、子どもは自然の成長が、その規範と反馳し、矛盾するこゝが豫想せられたり、目の前に對立させられたりするこゝが多い位である。そこで、躰の不自然性（自然の成長に對して）や、一種の無理強ひまでもが、躰けられるものにも、躰けるものにも、躰の過程を眺めてゐるものにも、ひし／＼感じられたりするのである。躰さといふ言葉から感じられてゐる一般の響は、この力の響である。

さて、いづれにしても、躰は自然の成長そのまゝではない。自然のまゝには放置しないし許容しない。子どもを人間社會の一員たらしめ又文化生活者たらしめるために、——躰けなしには、たゞ自然的成長があるだけだからである。

二、躰の歴史

以上の意義に於て、躰は教育の當然であり必須である。教育が自然そのものでない限り躰なしの教育はないのである。

しかし、教育の實際にあつては、躰はいろ／＼の位置に置かれ、又、相當いろ／＼の異つた目で見られ來たつた。こゝで教育の史的興味として之れを詳述する必要はない

が、今日、今更の如くにも躰が強調せられ、重視せられてゐる所以を理解するには、この歴史を辿つてみることも一つの途である。

その歴史には、大體三つの大きな時期を區劃することが出来る。第一の時期は、外からの力一方で教育が考へられてゐた時代である。假りに之れを、教育の他律一方時代でも名づけようか。教育の目的の要求するところに基いて、子どもを——彼等自身には何んの自力成長もないもの如く考へて——型へ押し込み、外から押しつけてゆくことだけが教育ださ考へたのである。それは日本でも、外國でも、古い時代の一般の傾向であつたさもないへよう。そして、かういふ考へ方の偏に行はれたのは、一面、教育目的の要求力の強かつた爲でもあるが、又一面には、子どもとの自然成長力に對する正しい知識が無かつた爲である。教育目的はいつの教育でも熱心であるさすれば、後の方の理由が主になつてゐたものと考へていゝかも知れない。

これに對する第二の時期は、子どもとの自然成長力に關する知識が進んで、それを尊重することが、前の時代への反動的強さを以て強調せられ來つたのである。子どもとの研究の進歩の點からいへば、科學主義になつたさといへる。外からの強制がゆるめられた點からいへば、自由主義さといはれたりする。子どもとの自然成長を偏重する反動性からは、兒

童本位主義だの自然主義だのさいふ言葉さへ行はれた程である。而して、その實行さして、躰が輕視される傾向になるのは免れ難いことであつた。

此の傾向は、前の時期の傾向に對する反動さしての行き過ぎがあるばかりでなく、教育さいふことの理からいつても、行き過ぎてならないことは勿論である。そこで、それを正しさに置かうさする堅實な教育觀は、當然起つて來ざるを得なかつた。之れが第三期に入る理論上の順序である。

そこへ、教育目的の今日の強化の時代が來た。子どもとの自然成長だけに任せて置いてならなくなつたさ共に、その自然的さか、自由的さかいふ教育過程のもつ教育性そのものが許されなくなつた。そんな原理、そんな過程で、國民鍊成は期し難いからである。これが今日である。

三、幼兒教育の場合

躰の歴史さしては、教育全體を通じて、以上の如き變遷が見られるのであるが、特に幼兒教育の場合には、對象が幼兒であるだけに、この時期にしても、その傾向の一段さ著しくなる趣を免れない。

すなはち、第一期的の傾向は、幼兒の心身の幼弱さに於て、その教育は外からのみ可能さいふことに考へられ易い。そこで、躰が必要であるさいふよりも、躰の他にその教育はあり得ないさ考へられたり、又、躰の最好適年齢、

こいふよりも寧ろ、躰の最容易年齢を考へられることになる。その結果、躰が教育の方法として考へられるよりも、躰けるか(即ち教育するか)教育しないか(即ち躰けないか)の二つに對立されたのである。従つて、自由か自然かこいふことも、教育の方法としてよりは、教育しないこと、教育しないがよいこいふこと、として根本的放任放置主義であつたり、又その反對に、躰けることになること、無制限不自然の強要や無理や無茶さへが行はれ勝ちであつた。

幼稚園の教育原理が、幼児をこの放任無理から救つたものであることは、こゝに再説を要しない。フレーベルの先驅的明識は、その點で顯著なるものである。しかも、それが前述の第一期から第二期への移行過程の反動性や急速性やのために、フレーベルの教育的明識を超えての行き過ぎ走り過ぎる傾向を生じた。殊に、教育精神よりも、教育の方法興味に淺く居る淺薄者流によつて、幼稚園の名に於て、自然や自由が、尤もらしく弄ばれたりさへした。教育

としてのそれだけでなく、自然の爲の自然、自由の爲の自由、そんなことは、苟も教育精神あるものゝ考へる筈のないことであるが、幼児教育の第一期的弊害の是正の爲に、こゝまでも幼児教育の方法上の一つの特色として考へられてゐることが、幼稚園内部にも外部にも、よく理解せられなかつたりした。さうして、遺憾なことは、事實上弊害をさへ生じたのであつた。

かうした誤まれる傾向、憂ふべき傾向に對して、革正が行はれなければならぬことは勿論である。識者の間に、憂慮を警告の聲が漏らされたのは當然である。教育審議會が幼稚園の重要性を議決するに共に、躰を重んずべきことを明示したのは、恰かも此の時であつたのである。次いで國民學校が躰の尊重を以て自らその教育方針とした。そして、國民生活體制の強化を必須とする大東亞戦下の今日の教育になつた。幼稚園の場合、躰は斯うして、その保育の重點となつたのである。(つゞく)

我が國の武士の躰

東京女子高等師範學校教授

石川謙

一口に武士と言つてもそれには色々な場合があるから一

概には言はれない。鎌倉・吉野・室町・安土・桃山・江戸と言つたやうな時代の移り變りにつれて武士の教養にも、本質にも、境遇にも大きな移り變りがあつた。細かに言へば江戸

時代の内でも初期と末期ではかなり大きなひらきが武士の生活の中に見出される。又武士の身分の相違が甚だ大きかつたのでそれによつても、躰の上にならぬ重大な相違があつた。將軍家とか、大名とか言つたやうな最上流の武士の家庭にあつてはかなり貴族的な、文學的な教養と共に、政治する人としての躰、人に上たる人としての躰が重んぜられたのであるし、五十石取り、三十石取りの低い身分の武士にあつては數ある武藝の中の一藝を、ほんの僅かの學問を外にしては武士一通りの禮儀作法を、さうしたものである。ひゞり身分の上下だけではない。その家が祐筆であつたり、儒官であつたり、茶坊主であつたりした様な極端な場合は別として、槍を以つて立つ家、鐵砲組に屬する家と言つた様な家に屬する職分の相違によつて、此處にも少からぬ躰の上の相違が現はれてゐた。このやうなわけで武士の躰を墨黒々とし筆書きにしてしまふ事は出来ない相談である。その上に年齢によつて躰のおもむきが次に移り變つてゆくのであるから細かに言へば限りのない話である。そこで今は江戸時代中期以後の、中流の武士の

家庭の、しかも稚い子供に對する躰について、やゝ漠然とした話を進めて見よう。

二

武士の子供の躰について第一に眼をつけなければならぬことは家庭生活それみづからが何よりも大切な教育上の氣圍をつくつてゐた事である。子供の世界を大人の世界から獨立させて、子供を大人の道徳や禮儀の拘束の外に、治外法權的な存在として眺め、さうした上で子供の生理的な特徴を直ちに子供の社會的な、道徳的な法則として認めやうとする所謂幼児教育の新方法は明治以後に於ける西洋文化の影響にもとづくものである。たゞひそこに長所と缺點との交響樂が奏せられてゐたにもせよ兒童研究の進歩は、もよより子供の爲に幸福であり、従つて國家の爲にも有益であつたに相違ない。がしかし武家の家庭に於いては、さうした子供の世界の獨立性はそんなに嚴格には承認されてゐなかつた。従つて生活のさの場合に於ても、親子子供は一體であり、子供の生活は大人の生活の中に、あみこまれてゐた。及ばぬながらも子供は年端もゆかない稚い頃から道徳的・傳統的な生活の仕方にて、既に家族の一員であり親子と共に従ひ共に守る共同の規準を持つてゐたのである。この意味に於て子供は始めから祖先につながり、祖先の遺風につながる生活の主體者たるべく養成されてゐる

た。具體的に言ふと、子供は生れ落ちるるにすぎず、氏神様——多くの場合には藩祖を祭つた神様におまゐりさせられる。つづいて食ひはじめの式があり、髪置きの式があり、袴儀の式があり、元服の式があり、言つた様に生活の折目、切目に家を主體として子供をめぐる色々な儀式が行はれたのである。かうした儀式の中に子供は、知らずくにはあるが家の者、國の者として育つて行つたのである。儀式を我が身のものとする躰が、我が身を我が家、我が國のものとする基本的な考へ方と共に成長したのである。かうした儀式は言ふまでもなく、子供の教育の爲に、子供の躰の爲に考へ出された行事ではなくて、否むしろ家や國が子供を迎へる儀式として考へられるはづのものであるが、それでゐるそれは立派な躰の役割を演じてゐた。儀式だけではない、武士の家庭の日常生活、父のつこめ、母のつこめ、父のあそび、母のくつろぎを内容とする毎日くゝの家の生活それみづからがその君とするところへの忠勤、その先祖とするものへの孝養を通じて轉廻してゐたのであるから、それは勤めの仕方や、仕事の内容と共に、武士の魂を染み込ませてゆく力を持つてゐたのである。このやうに家の生活全體がそれみづから教育的な大きな力を持つてゐた事はそれは武士の家庭の仕事が全體として簡素であり、單純であり、さうして所謂分業的な大資本主義的な姿をこらぬま

しまりのついたものであつたことが大きな理由となり、事情になつたであらう事は疑はれない。

三

これまで述べて來た様な、基本的な地盤の上に武士の家庭ではその子を仕込むのに色々な工夫が長い武家生活の傳統の中からあみあげられてゐた。天保年間に出來た『前訓略』といふ書物があつて、武士の子供の毎日々々の生活を導く指針を簡單に書きしるしてゐる。それによると、

朝はやく起き 口すゞぎ、手水つかうて 一ばんに、

まづ神様を 拜むべし、これ日本は 神様の、

御國なれば 神様の、 そのお蔭にて たれくも、

のみ食ひ衣服 着る事も、 みな神様の お蔭ゆゑ、

第一ばんに 神様へ、 御禮儀をなして おん禮を、

うやまひ深く 申すべし。ぢき其の次に 御城の、

方へ手をつき 御禮を、 申し上ぐべし 神様を、

御恩はおなじ 事ぞかし。さて其の次は 御佛壇、

御先祖さまを 大切に、 厚くつゝしみ 拜むべし。

ひいぢぢ様や ひばば様、 きつゝ正しく 佛壇の、

内にござらせ らるゝなり。

この様にしるされてゐる。これで見ると朝起きるにすぎずに手を洗ひ、口をすゞいで體を清めて第一番に神様を拜む様に躰たものである。日本は神國であつて、神様の御恩に

よつて、かうして生きて居られるのであるから、毎朝々々その御禮を申し上げるのである。我が獨特の尊い國柄に對する自覺ミ感謝報恩の厚い固い信念ミを結びつけて、國家觀念を朝な朝な、成長させる様にしむけてあつたのである。次に我が直接の主君たる殿様のるますお城の方へ向つて、手をついて御禮を申し上げさせるのである。さうして第三番目には、佛壇を拜む事になつてゐるが、これは我が家の先祖の御恩を身にしみくゝ味はひしめて、御禮を申す意味である。かうした朝の行事の中に於て、國恩を思ひ、藩侯の恩を思ひ、先祖の恩を思ふ國民的な自覺が信念としてめざめさせられてゆくと共に、報恩感謝をもミゝする我が國民道徳が立派に幼い者の胸の中に培かはれてゆくのである。

四

國を思ひ君を思ひ親を思ふ感謝の念ミ共に 報恩の爲に命を捧げる覺悟ミ、報恩の事業の爲に立派に役立つ爲の日頃の修練ミが重んぜられてゐた。その修練の大事な一つの部分ミして言葉の遣ひ方についての躰があつた。言葉の中に人の魂がやぎり力がやぎるのであるから、いかにも武士らしい言葉を學ばせることは、言はゞ魂を養ふ大切な躰でもあつた。『武詞短歌』といふ言葉遣ひを中心とした教科書が出来てゐて一般武士の家庭では、かうしたものを規準ミ

してその子を躰けたのであつた。いふまでもなく武士の言葉といふミ、おのづから戰場に於ける軍令軍規に關するものが主ミなるのである。ある意味からいふミ、さうした場合に於ての言葉の重要性がしみじみ體驗せられてゐるのであるから、したがつて日頃から言葉の躰がなかく、嚴格であつた。

武士は、詞のうへも、氣をつけて。をくれきたなき言の葉も、常にも言はで 敬しめば、事にのぞみし其の時も、自然ミ恥辱 なきぞかし。

かういふ心得を念頭に疊ませておいて言葉の遣ひ方の中に武士たるものゝ魂を培養しようとしむけたのである。言葉は心の衣服といふ格言があるが、言葉にやぎる精神の強さ、髓かさ、氣高さを養ふが爲の武士の家庭の躰である。切らせた射させた突かせたは、味方のものゝ武者詞討死するを味方にて、

幾手々々ミ、敵のは 幾切れにして立つといふ。人數は進む、懸るミも、 敵は寄するミ言ふものぞ。にぐるミいふは敵方の 人數を引くを言ふぞかし、味方はのくる引取るミ……

このやうに、使ふ言葉の端々にも攻撃精神をこめて武士らしい意地を立て通すやうに躰たものである。言葉の一つ一つにも、いざ命をかけての戦ミいふ日への心構へを籠め

て賤たさいふこまなごは今の私共の學んでよい點であらう
と思はれる。

五

武士の家庭では何時如何なる時でも、いざ戦争さいふ場
合を目あてにして、それに役立てる様に賤たものであつ
た。従つて忠義の精神を中心としたのは言ふまでもないが
約束を重んじたり、恥を飽くまでも受けない様に仕向けた
りした事は言ふまでもない。日頃から質素な生活に慣れさ
せたり、寒さや、飢に對して耐へ忍ぶ習慣をつけたりする
様にしたのもこの目的から來てるるのである。従つて武士
の賤の中では常に剛毅と柔順とが手を結んで隣り合つてゐ
たし、死をおそれないこと、命を大切にすること、一
つの精神の二つの面として考へられてゐた。さうして、
かうした精神的な魂の修練とも言ふべきものが實は學問や

始めの賤

始めが肝心さいふこまは賤をしてゆく時殊に強く言はれ
てよい事と思はれます。家庭から幼稚園さいふ社會に入り

武藝の稽古にも家の中でのさゝやかな言動の端々にも、満
ちてゐるやうに仕込まれて、その日くを目に見えぬ戦場
さして暮す事になつてゐたのである。

この様に考へて來るに武士の子供の賤は大人の生活の中
から自然に生み出されて來るのであつて、此處にも大人の
生活全體が武人らしい簡素さと單純さを以つて立派に教育
的な力を備へてゐたのである。わざとらしい、あたかも活
花・切花の様な行儀や賤が特別に仕立てられてゐたわけ
はない。だから子供はいつでもその子供らしさを手ばなし
に、無制限に歓迎される事は全くなかつた。子供の内から
大人へ大人へ急いだのである。さうして、そこにも、そ
れほごの意味に於ての『子供』がなほ且つ見出されてゐたの
である。

附屬幼稚園 清水光子

たてには、子ぎもの小さい心はさぞ新しい事、珍しいこと
で忙しいでせう。始めて大勢の世界に入つた事が何よりも

大變な事です。獨りなら、又家庭でなら許されてゐた事が
大勢の中の自分さいふ事で抑へられる事が出て來ます。

この點が、幼稚園の始めの躰の一つの大事な所ではないか
と思ひます。團體生活をしてゆく氣持の基礎はこゝでしつ
かり養はねなければならぬと思ひます。がその抽象的な
考へはさておき、具體的にはまづほんの形式的な事から躰
けてゆくことになります。そして團體生活としての幼稚園
の毎日を軌道に乗らせるやうにしてゆき度いと思ひます。
らくに、本當に自然的にすらくささせ度いと思ひます。
私のほんの浅い經驗の中から氣がつかました事を少し書き
出してみます。

(一) 挨拶について

朝「おはやうございます」をします。清新な子ぎもの氣持
をこれに表して文字さほりさびこんで來るこの挨拶です。
形式にこだわるのではありませんがきちんさせませう。
こちらもちやんさおはやうございます受けたいと思ひま
す。お歸りのさやうならごきげんやうより大事な挨拶かも
知れません。

お食事前の兵隊さんありがたう、いたゞきます、や濟ん
でからのごちさうさま、言ふまでもありません。これは一
緒に食事する大人の態度が本當によくうつると思ひます。

お歸りの挨拶もさうです。明日又………さ歌はなくて

もいゝからこの時は靜によく落付いてするやうにし度いこ
思ひます。

その他、始めから躰度いのは「ありがたう」の言葉です。
何でもしてもらつた時に素直にありがたうを言ふやうに機
會を捉へてはきかせ、同時に大人が言つてみさせませう。

(二) 手洗ひ、うがひ等について

よくこすつて手を洗ふ、ていねいにうがひするのは言ふ
までもありませんがそれと一緒に水の出し方、捨て方、ふ
き方をもちをつけ度いものです。人のじやまにならないや
うにして、自分だけきれいになればさいふやうな方は一
番排斥されなければなりません。又斯ういふ所に書くのも
いかゞかと思はれますが不淨物の使ひ方についてはよく氣
をつけねばならないと思ひます。大勢の人ミ一しよの、さ
ういふ場所での作法はこの小さい中に習慣的によくしてお
き度いと思ひます。

(三) 物の扱ひ方について

身につけるものゝ取つたりつけたりは出来るだけ一人
で、人手を借りるのを當然と思はせないやうにし度いと思
ひます。始めは下手な所を直してやり、かけにくい所だけ
ボタンをかけてやるさいふ様にして、もう幼稚園の子ぎも
は一人で出来る、さいふ自信を持たせて喜んでするやうに
し度いと思ひます。又さういふものを叮嚀に扱ふやうに躰

け度いと思ひます。帽子のゴムひもやエプロンなどをしやぶつたり、上衣を投げたり、手さげ袋をふりまわしたりしないこと、そのやうなくせのある子ぎもは一人一人根氣よく注意します。自分のお道具箱や帖面の使ひ方はその使ふ最初の時に使ふ順序やしまひ方を教へて習慣つけるやうにしませう。きちんとしなければならぬといふやうに、但し神経質でなくさうなるやうにきちんとするくせに度いと思ひます。幼稚園のみんなで作る用具はみんなのこいふ事で大事に使ふやうに氣をつけませう。ブランコ、滑臺などはもごより、繪本、積木等まで、らんぼうに投げたりふんだりしないやうにし度いと思ひます。靜に使つて元氣に遊ぶのがいゝのだこいふ事を知らせ度いと思ひます。みんなのものを言つて大切に氣をつけて、しかもそれで樂

本をみる躰

入園したばかりの頃、見送りのお母様はやうやく離れられるやうになつたものゝ、まだお友達と一しよの遊びに入つてゆかれないはにかみやさん、「遊びませう」と誘つて

しく遊ぶ習慣といふやうな事は小さな事かも知れませんが、團結といふやうな氣持の淡いものがこんな所にある様に思はれます。

斯うして考へてみますとごんなに躰の上に環境が大切かがわかつて來ます。よい習慣はよい環境からです。人も環境の内である事は勿論です。

以上は幼稚園に入つた始めについて考へたのですが年がかはつて大きくなつた始めといふのは又躰の上で絶好の機會を言へるかと思ひます。大きい組になつたさいふ喜びを自負を一ぱいにふくらましてやつて自重を勵ましを躰へのすべての部分で與へたいと思ひます。

附屬幼稚園 志村貞子

も首を横に振る子供が、「御本をみませう、いらつしやいな」と誘ふに大抵ついてきます。「この御本をみませう」とお返事なし。「これみませうね」。一冊をさりあげてお話をし

ながらみてゆく。大好きな汽車が出てきました。眼を輝かせたAちゃん、「キシャ」はじめてお聲が出てきました。

「どう汽車ね。Aちゃんは汽車に乗ったことあるの?」「うん」「さう、さうへいどうしやつたの。」「田舎」「い、い、いね。」「あなたもいらつしやつたの?」「お父様とお母様も、赤ちゃんも、Aちゃんだんく、お口がほぐれてきました。

こんなお仲間が大勢で先生が一人一人のお相手の出来な時もあります。誘はれたBちゃん椅子にかけて本をひろげる。だまつてみます。終りまでみてしまふ。まだみない本も取りかへます。お仲間が三人、四人、「取りかへて」「僕これみたら君にあげる」など、こゝでもだんくにお友達同志のお口がほぐれてきました。

幼稚園にすつかり馴れて、元氣に遊ぶやうになつた子供達、ふやし鬼、開戦ごつこに汗になる。一やすみ、お部屋や樹蔭なごに集つて本をみます。すつかり静かになつた。思ふ。何時の間にか小さな頭を寄せて本をみます。愉しんでみます。兵隊ごつこの一隊も足を止めてのぞきこんでみます。そこでは本を中心に活潑な話合ひがはじめられるのです。

子供達はもうはつきり「先生、この本よんでちようだい」「好きな本を選んで持つて來ます。本當に面白さうに、

或時はごつご聞き入り、或時は活潑に話しかけながら本を愉しんでみます。

子供達は實に本が好きです。その繪を見て愉しみます。話しあつて愉しみます。そのお話をきいて愉しみます。文字に興味が出て來る。自分で讀んで愉しみます。本は子供達の親しいお友達であり、それだけにまたその與へる影響も非常に大きいのであります。従つて先づ如何なる本を與へるかが重大な問題になる。こゝは申すまでもありません。しかしこゝではこれは別問題として、與へられた良い本を如何に見るべきか、且、見るやうに見せるべきか等の問題について、三記してみようと思ひます。

「本をみる」を申しました。國民學校に於ける國民科國語の指導は、讀方、綴方、書方、話方の四分節に分けられてをり、しかもこの四が互に相連繫して、密接不可分の關係をもつてゐるのであります。

「本を見る」こゝに國民學校とは程度こそ違ひますが、それだけの廣さを與へて考へたいと思ふのです。即ち「本を見る」こゝの中に、讀んでもらつて聞くこゝ、繪をみるこゝ、繪について亦お話について話すこゝ、更に進んでは字を讀むこゝ、或は書くこゝ、等が相互に密接な關係を以て考へられるのであり、延いては大きく言語修練、生活訓練にも

結びついてくるのであります。

○お話はよくきゝませう。

人の話を注意してよくきゝこいふことは何につけても大切なことであります。よく聴く態度を養つてゆきませう。

それには先づ落着いてはつきりごわかりやすく、興味をもつてきけるやうに話すこと或は讀むこと、先生や母親がよく聴く態度の出來た人であること等、先は此方に向いて來ます。よく聴ける子供は言語が豊かになり従つて生活も亦豊かになります。

○落着いて、よく見ませう。

幼児に與へる本には讀む部分と共に、見る部分即ち繪が大切な役割を持つて居ります。その繪がどんな事柄を表現してゐるかこいふこと、また、かゝる事柄を表現するにはかういふ繪によればよいこいふ事、また繪によつて新しいものゝ形や色を知る事等々が渾然と一になつて幼児に働きかけてをります。お話をきゝながら繪をよく見てゐる子供は字が讀めなくてもやがて繪によつてその話をすつかり自分で話すやうになります。又自分の經驗等を繪にまごめて表現する事も出来るやうになります。しかもその爲には正確な觀察が必要でありますから、本の繪をみるこことによつて養はれたかうした態度はすべてものを正確に明瞭に見るこいふ態度を培ひ見聞を廣く深くし生活全體を廣く豊かに

するものであります。本を見るのに落着きなく次々頁をめくつて見たり、順序を無視して平氣な子供がおります。

かゝる場合には、その子供の好む本を少數與へ大人が話し方に工夫し話そのものに興味を持たせ、また繪に注意をむけるやう繪についての面白い説明、子供の話し合ひをするなご本を見るこことに興味をもたせつゝゆつくりこいていねいに見せるやう心遣ひがなくてはなりません。子供と共にみながら二三頁をばして平然としてゐたり、自分のみる速さでさつさこ見ていつたりするお母様や先生はいらつしやらないここと思ひますが。

○はつきりご落着いてものをいひませう。

本によつて自然の中に語り合ひこいふこことがよく爲されます。これを適正に指導することによつて種々の効果をあげ得るのであります。こゝでは先づはつきりご落着いていふこことを舉げましたが、漸次發音の矯正、語法の訓練等へ導いてゆけますし、これを更に言葉の生活即ち日常の挨拶、應答等に活用すること出来るやうにします。本による語りあひから正しい國語の修得にまで導いてゆくには指導に當るものゝ根氣、指導者自身の正しい國語の使用が絶對に必要であります。

なほ特に言語發表を嫌つたり、憶したりする子供がありますが、本による語りあひに、極めて自然の形において、

これらの子供の興味を喚起し、話の誘導をたすけるものと思はれます。特に氣長な指導を以て、話すことに興味を自信をも持たせ、氣輕に話すやうに仕向けてやる心づかひが大切であります。

○お行儀よくみませう。

本をみることは日常の挨拶、返事等言葉の生活へ結びついてくると同時に行儀、作法の修練へも結びついてきます。本をみる時の姿勢、本の扱ひ方等であります。これ等についてはすでによく御承知のことではありますが、前同様大人の態度が影響するところが大きいのでありますから、扱ひ方にしても、大切にしないさいといふだけでなく、破れ

遊 戲 に よ る 躑

今度、學徒體育訓練實施要綱の發表に依れば、その基本方針としては、戦力増強、聖戰目的完遂を目標とし、學徒の體力、健康状態等を考慮し、適切な訓練により、強健なる者を一層鍛鍊すると共に強健ならざる者の強健化に力めつゝ、強靱なる體力を不撓の精神との育成に力むること、然して訓練は平素より普及強化徹底せしめられること。

たら繕ふことも子供さしよにやり、後始末をよくこいふことも、先づ子供達にしまひやすいやうなしまひ場所を與へておいてから要求すること、心なき大人のする廢物になつた本の扱ひ方が、子供達をして本を粗末に扱はせる動機になることも考へて慎重にすること等、心すべきことが多いのであります。

以上申し述べましたところは甚だ不十分であります。本をみる「こ」が子供達に及ぼす影響の頗る大きく、廣く且深きにわたることを十分お考へ下さいまして、「本をみる」のよき躑を幼児達のために躑けて下さるやう希みます。

附屬幼稚園 古 澤 靜 子

又特に男子學徒に在りては、卒業後その凡てが、直ちに將兵として役立つことに必要な資質の鍊成にある。云ふのである。

この要綱は勿論學徒を對象としたものであるが、基本方針は、大切な幼児の身體鍊成の上にも及ぼし考へられねばならないと思ふ。

緊迫せる現下の情勢に於て、體育全般の高度の發達が要望される今日、幼兒の行動に於ても、空襲をうけたま假定した場合、命令に従つて直ちに指定の場所に集合し、そこから列を作つて待避所へ走つてゆく。或はその前に坐布團を頭にかぶる。或は敏捷に机の下で伏せの姿勢をこる。云つた様に、大人が濡れ筵で火を消し延火を防ぐ積極的な活動をする内、子供達にはこの様な事が、迅速に秩序正しく整然と行はれなければならないから應變の處置をまり得る爲の忍耐、自信、協同、機敏、果斷等の自由な身體支配の能力は平素から養はれ、躡げられてゐなければならぬ。

今、それ等の事を思ひ、遊戯に於て幼兒の躡げらるべき方向の一部が、當今の時勢に對應すべき行動にあることを考へて、之を彼等の活動と切り離すことの出来ない遊戯と關聯させ、幾つかの運動を遊びによつて取扱つてみたいと思つたのである。

一、すみやかに行動する爲の遊び

其の一、

一同音楽に合はせて、自由な方向に散在してスキップをし、適當な折に先生は樂器で「止め」の合圖音樂を全然こめてしまふか、或はハホト、ハヘイ、ロニト等の和音を三回位續けて弾くをし、一人の幼兒を指名する。それ

を聞くや、一同は直ちに指名された幼兒のところに集つて駈けてゆき、指名された幼兒を先頭に、一列に並ぶ。出来るだけ早く順序よく並ぶことにする。

其の二、

一同椅子に着席してゐる。最初一番端に着席してゐる〇〇さんが音樂にあはせて駈け出し、あらかじめ指定された場所で止まる。次に隣生が駈足で来て〇〇さんの後に立つ。立ち止まるま直ぐに次の者が出てその後を並ぶ。ま云ふ工合に、始めの者から順々に音樂に合はせながら間をおかずに出て来てすみやかに列を作る。

列が出来たら又その位置に戻る事をする。即ち最初の者より音樂に合はせながら駈足で元の位置に着席する。着席するま直ちに次の者が同様にして歸つてゆく。

この様に音樂と共に全體が機敏に一つの動作を行ふのである。

其の三、

之も全生音樂に合はせ、自由な方向にばらばらになつてスキップ或は駈足をしてゐる。先生が「右」ま云ふま、ばらばらになつてゐた全生は二人づゝ組み、各自右手を繼ぎ合せ、二人で右の方にくるく廻る。

(一人で駈る時、一人で手を組んで廻る時は、音樂をかへてみる)

音楽が變るに、各自手を離し、又自由に駆る。

左に云ふ合圖がある時には、集つた二人は互に左手を繼いでくるく廻る。

(音楽は簡単な駢足調のものをを用ひる)。

其の四、

全生、行進歌を歌ひながら自由に歩いてゐる。突然先生の「五人」さか「三人」さか言ふ合圖に依り、直ちにその人数に集る。

ハホト、ハヘイ、ロニトの和音の判別の出来る幼児ならば、あらかじめ、ハホト二人ハヘイ三人、ロニト四人さ云ふ様に定めておき、行進の途中でハホトが鳴れば二人寄り、ロニトが鳴れば四人集るさ云ふことにしても面白い。

其の五、

任意の場所を幾つか選び、例へば室の向ふの隅、こちらの長椅子の前、ピアノの側さ云ふ工合して、そこに一同が集れる位の場所を描いておく。

一同音楽にあはせながら、駆るか歩くかする。行進の途中で突然高い音が連續して鳴り出せば、隅の圓の中に駆けて行つて集り中位の音が鳴つた時にはピアノの前に、更に歩いてゐる低音が續いた時には、一齊に椅子の前の圓の中に入るさいふ様に、行進の途中で鳴り出す異つ

た、高中低音を聴いて、前以て約束してある場所にすみやかにさび込むのである。

(高中低音の代りに、ハホト、ハヘイ、ロニトの和音を用ひて取扱つてもよいと思ふ)

一、みんな揃つて駆ること。

皆で駆る時には、步調を整へ、揃つて行動する事が肝要であらう。

先頭に大きい者が立つに、後に續く小さい者は同じ步調を保つ事が出来なくて次第にへだたりが出来てくる。全體で駆る時は成るべく小さい順の方がよい。そして步調を合せて駆ることにした。

駆る事は又個人の心臓をも強くするものである。

園庭を廻る距離は一回二百米位が適當ではないかと思ふ。勿論最初はもつと短い距離でなければならぬ。

先を争つて押しついたり、口やかましく騒ぎながら駆る事は禁物である。

時には曲線走路を選び、木から木へ、又は他の障礙物を目標に、わざと夫等に觸れない様にして障礙物を廻つてくる。

先生の爽やかなかけ聲や、さえた笛の音の應援は、一層子供達の心をひきたて、足さりも軽く元氣な駢足を續ける事が出来るであらう。

お畫かき、お仕事の躰け

附屬幼稚園 上 遠 文 子

「三つ子の魂百までも」昔から云はれてゐる様に、幼児期は私共の長い人生の出発點であり、種々生活の營みが始り、又習慣も作られて行くのであります。それゆゑ、その

習慣の好いも、悪いも、私共一生の源となり、第二の天性ともなり、後年をも支配するのであります。かく考へる時、幼児期の習慣の養成即ち躰けは非常に大事な事であり、私共は正しく、躰けよき習慣をつける様考慮したいものであります。今此處に、お畫かきする時、お仕事する時には如何なる躰けをせねばならぬか考へてみませう。

一、お道具箱を出しにゆく時順序をまもり並びませう。これは一般の躰けですが、引出しを開けたりする時も、人を押しのけてしたり、又、人の頭の上だらうが頓著しないといふ氣持をやめさせ、順序よくならんで出す様にさせませう。

一、お道具箱は帳面の前にきちんご置き、その時使用する、ものだけその上にのせませう。

お畫かきしてゐる間、お仕事してゐる間、クレヨン、鋏

等をそこいらに散らかしてする事はやめさせ、箱の上につきちんごのせてする様にませう。これは先生が氣がついた時いつも注意し、なほしてあげる様にしたいものです。

一、鉛筆は正しく持ちませう。鉛筆に限らず、クレヨンでも正しい持方を教へたいものです。握つたり、違つた指を用ひたり、又左手で畫いたりするのは、特に念頭において根氣よく注意し完全に治したいものであります。

一、姿勢をよくして畫く事。これは第一に大切な事の一つで、畫く時の姿勢の好し悪しにより體型が定められてしまひ、それにより健康にまで及ぼす事ゆゑ、特に注意していただきたい事であります。椅子にたつぷり腰かけ机と眼との間は三十糎の距離を置くのが正しい姿勢で、胸をまげれば背骨がまがり、首を垂れれば、眼を悪くし、猫背になつてしまひます。自由に型のはかる幼児ゆゑ、この正しいこの姿勢を常に注意し徹底させて、健全なる體をつくる様したいものであります。

一、帳面は無駄にせず順々に用ひる様にませう。物資

の豊富にある時でも、人は儉約いふ事を考へねばいけません。ましてこの戦時下、一枚の紙も無駄に使つては申譯ない。幼児にも紙の大事な事をしらせ、書なほしや書損じをしない様に注意したい。書損じた場合、先生が巧みに厚生させてあげたいものです。又順々に帳面を使ふといふ事も、几張面な氣を養ふにも好い事でありませう。こんな事は無いと思ふが帳面をやぶいたりするのは斷然やめさせるべきであります。

一、後片づけを忘れぬ様にしませう。お仕事がすんだ時は帳面、お道具箱は引出しに必ずしまふ様にしませう。お友達遊びに夢中になり忘れがちな人は習慣がつくまで、一々呼んで片づけさせる様にしませう。

一、お仕事で屑は床に捨てぬ様一定の所に入れませう。切紙の時なご、澤山の紙屑が出ますが、お仕事がすんでから自分の圍りの紙屑はひろつて、一定の所へ入れさせる様にいたしませう。

一、お畫かきの場合、鉛筆、ゴム消は使用しない様にしたいものです。幼児期の繪はクレヨン畫です。その場合、下繪を鉛筆でかきますが、これはしない方がよいのではないでせうか、鉛筆を使用するに輪廓は明瞭になり一見、上手にみえますがクレヨン畫の好きが失はれてゐます。クレヨンの太い線はクレヨン畫の特長とも云ふべく、其處に面

白さがあるのではないでせうか。それからゴム消でやたら消す事は、畫面を汚くするに同時に繪が引立ちません、接角の繪もゴム消の使用によりその繪は生氣を失つてしまひます。これはクレヨン畫のみに限つた事ではありません。これらの事は何れも習慣で、なれると何でもなく畫けるものです。

一、お畫かき、お仕事の途中は、用事以外には立あるかぬ事。これは年少組の最初なごは望めない事かもしれませんが年長組になつたら徹底させたい事です。お仕事の途中ふらふら他へ遊びに行つたり、すまぬのに他の事をしたりするのはやめさせませう。これにより落着きと忍耐を養ひたいものです。

一、鉛筆等噛むのをやめませう。道具類を大切に使用ませう。殆んど此頃はみませんが鉛筆の後を噛んでしまふ癖は衛生上からいつてもわるい事ですのでやめさせませう。すべてクレヨン、鋏、鉛筆は大切に取扱ふ様躰け致しませう。

その他精神的方面に、お畫かきする事により、お仕事する事によつて、落着き、努力と忍耐、几帳面、工夫、等を養ひたいのであります。

幼児はお畫かきを楽しむ。お仕事を楽しむ。その楽しみを私共で打こわさぬ様、しかしその躰けの機會を失しない

國民學校より幼稚園にのぞむ

東京女高師附屬國民學校訓導

前田四郎

一、子どもを見つめて——子供 の理念

幼稚園にしろ國民學校にしろ子供の無心に遊ぶ姿——砂山を作り、草木を植ゑ、ミビかふ蝶に心を躍らせ、水晶のすだれのごとく降る春雨にきものゝぬれるを忘れ、追ひつ追はれつ鬼ごつこに興じ、一枝の名もなき野邊の花を胸にかざして喜ぶ子供の姿、愛らしき瞳を輝かして遊びに、學びに専念する様を見ては、子供によせる古今東西の名言は少しさしないが、誰しも聖なる氣持に打たれるに相違あるまい。子は家の子として、何物にも代へられぬ所謂子寶である。萬葉の歌人、山上憶良の『銀も黄金も玉も何せむにまされるたから子にしかめやも』の歌を二三度口ずさんでみる。『ごこきはなしに無心に遊ぶ子供たちが、何物にもかへられぬ子寶であるごこにしみじみ感ずる。』

子供がたから子である所以のものは、たゞ單に父母の子であるごこいふ意味ばかりではなく、今や廣くなり發展しつつある日本の國の根柢であり、源泉であるごこに存する。

換言すれば、日本の子供は、懼れ多くも陛下の赤子であるからこそ、たから子なのである。

國民學校は、かゝる陛下の赤子を鍊磨育成して國民として立派な人物になり得る基礎を作る處であるが、やがては國民學校に入學する幼稚園にあつても、たゞ、ごここのおぼつちやま、おじやうさまをおあづかりしてゐるのだごいふ理念からは去つて、陛下の赤子を——たから子を導くのだごいふ理念に立脚して無限なる保導に當るべきものご考へる。

そして、かくの如き子供の教育に當る先生は、國家の期待ご親の信頼を一身に擔ひ、子ごもの心身の發達に即して、國民鍊成の第一歩を踏みだす光榮ご感激に自ら燃え、自ら沸騰するごこがのぞましい。

二、萎縮してゐない子——大國 民の萌芽

國民學校は、皇國の道に則りて、初等普通教育を施し、國民の基礎的鍊成をなすを以て目的とする——のである。

基礎的の錬成、皇國の道の修練、心身一體的等々の精神は、新しく國民學校教育に活きたものとして入り入れられて、斯の道の實踐に培はれてゐるが、初一に入學せんとする幼稚に、國民學校はかくかくのためにかくあるべしとなして、如上の精神を早がつてんにこり入れ、乃至は加味して、鍊成々々で強いて、そのため天真無垢な子供らしさを壓へるが如きことあつては絶対にならぬ。

幼稚は獨自の存在を意義を持ち、彼等の天真爛漫の姿こそ全體なのである。苟も幼児は、大東亞の盟主となり、世界新秩序建設の指導的地位に立つべき我が國の將來を擔ふ大國民の萌芽であれば、特に雄渾博大な氣宇を育成すべきである。初一の兒童の中には、入學當初に於て往々登校をいやがる者がある。從來の小學校に於ても同様なことがあつた。國民學校では躰を重視してゐる。言語訓練が從來以上強く要求されるやうになつたが、子供にこつてそれはけつして重荷であるべき性質のものではないのが國民學校の新精神である。幼稚園から來たものの中には、比較的に入學當初先生を怖がるやうな小心の者が少く、また、學校の壯大な建築に畏縮するやうな者も殆んどなく、不明の發熱を起すやうな者もないのは、まことに結構なことであつて、子供を萎縮させない指導の仕方の結晶としてうかゞひ知ることが出來、うれしいかぎりである。

子供は大國民の萌芽であれば、活潑で子供らしく、明るくて無邪氣な、童心にみちみちたおほらかな子供が、國民學校ではほしいのである。

三、いそぎすぎではゐないか——

知識の問題

幼稚園のある一部に於ては、國民學校教育の考へ方、仕方とは正反對の方向を示してゐる傾向なきにしもあらずの感がする。國民學校の教育に於ては、知識を第一義的な對象物としてはゐる。從來の小學校も國民學校の異なるころの一はこゝにあるのだ。私はかく考へるのであるが、第二義的にはこゝにかく、第一義的には問題の對象としてゐない。換言すれば、國民學校は結果としての知識を意識の上にはおかぬのである。もしもこゝ一部の幼稚園に於て結果を早くのぞみ、もの知りげな子供をしこむをもつて天職なりを自負する者あるとするならば、それは、國民學校教育の方針とは全く打つてかはつて、相異なるものである。こゝいふばかりではなく、教育の考へ方に於て範疇を異にし、既成の舊い觀念の遊戲にたはむれるあはれな孤兒といはねばならぬ。字が早く書けるやうに、繪が早くかけるやうに結果に走るのではなく、知識の求め方、熱こくものごを追求せねばやまぬ態度を、子供ながら、各個性に即して養つてほしいと思ふ。例へば、發音もアクセントが

正しくなつてゐないのにもかゝはらず、先を急ぐ馱馬の如く、文字を教へ込んでしまふが如き一現象は、盲目的親の欲望にかられて、結果のみに落ち入つた不自然の姿を示す何ものにも外ならぬ證左である。子供の遊びの生活の中には、見るもの聞くもの悉くが不思議に感じ、面白く思はれ、なつかしい恩物であらうが、遊びの全生活の中から、いろいろ三問ひかけ、疑問とするところを話しかけてくるに違ひない。その場合、先生は幼児の質問に對して、たゞ答へをあたへて満足させて、知識を豊富にしてあげるまいふばかりでなく、むしろこれより誘導して、草木に水を與へ、手入れをし、そだてはぐ、む態度を養ふこと——知識の求め方に關する導が肝要ではないか考へる。平明な言葉ではあるが、結果を急がず、各兒の能力に即して、すなほに伸ばしてほしいのである。能力なみに伸ばしてほしい。

四、からだについて——健康の問題

幼稚園から來たものに特に多い傾向が認められるといふ意味あひのものではないが、國民學校の低學年を受け持つてみるに、子供たち一般に次のやうな共通の抽出事項がある。それは、病氣に對して、神經過敏になりすぎてゐることである。些細な熱にすぐにも驚きふためいて尊い學校の授業を缺き、一つ二つのごくかすかな咳音に遲參させる。

かくの如きことは、幼少の頃から病氣に對して、あまりに神經過敏になりすぎてゐる結果ではないかと思ふことしばしばである。文化文明の進歩發達と共に衛生思想が高まつて來たことは事實であるが、それがために神經過敏になつて病氣に驚かされる必要はなく、強い風だまいつてびくびくし、大粒の雨が降つて來たまいつては、體を心配しびくびくするやうな家庭があることするなら、適當な方法をもつて、消極的保健よりもつぎ積極的保健に留意するやう注意を喚起しなければならぬ。

病氣をおろそかにしてはいけませんが、神經過敏の先入觀を持たぬ元氣旺盛な子供を國民學校に入學させてほしい。

五、躑について

國民學校に於て躑を重視することは前にも述べたが、殊に國民學校の低學年や幼稚園の子きもたちにも躑の問題は重要な課題である。この時期の子きものみについた躑は、先入的なものとなり、將來を左右することも亦大きい。幼少の頃身についた美しいならばは、國民學校の高學年に至つても連續されてゐる幾つかの具體的例も經驗したが、また一方、悪く躑けられて國民學校へ入學したものは、なかなか矯正し難いものであることも知つてゐる。幼稚園の子きもの躑については此の點充分御留意いたゞき深厚な配慮がのぞましい。左に氣をつけてほしい諸點を列擧してゐ

よう。

(イ)自分のこゝは自分で

自分で使つたいろいろな道具、お辨當箱、衣服、はきもの等の自分の身のまはりのものは、力めて自己の獨力でなす生活態度さ心ぐみをしつかりミ植ゑつけ、かりそめにも依頼心を起し、人をたのみさする弱い精神の持ち主ならざるやう賤けてほしい。勿論國民學校に於ても同様な態度で一貫して居るのではあるが。

(ロ)明朗な従順性

父母、先生、長上のいひつけをよくきく態度をつくつてほしい。知つたかぶつた態度を示し先生のいひつけをおろそかにするやうな態度は絶對にさげねばならぬ。すなほで明るくよく先生のいひつけを守る子は、成績も良いのは當然である。

(ハ)返事の仕方

明確な「ハイ」の返事、「さうであります」の立派な答、「わかりません」のはつきりした表示、——これをもつた幼児は、氣品がある。口をあんどりさあけて、たゞ「ウン　ウン」さ答へるやうな應答の賤け方はよくない。

(ニ)正しい言葉つかひ

言葉は日本精神のしるしであり、幼稚の言葉は彼等の生活の表象である。正しい言葉つかひに馴れさせることは、

難しい問題であるが幼稚園に於てもくれぐれ御注意いたゞき、正しい言葉をつかはせたい。母を呼ぶに、ママ、母ちやん、おつかあ、かあさんミ呼ぶものがある。『ママミおかあさまを呼んではなせいけないのですか』この私の質問に對して、初等科一年の子供でも、何だか『外國人のやうだから』さ答へてにつこり笑つた。英米的範疇に基づく言葉つかひは驅逐するやうに注意したい。

(ホ)正しい姿勢に氣をつけてほしい。

(一)其他の基礎事項を擧げる。

○皇室國家に對する國民的心情の陶冶

○國旗に對する嚴肅性の涵養

○禮法の初歩訓練

○食事の作法

○敬神崇祖の念の培養

○友達相互のくらし方

○頭・髪・手・足・爪・耳の清潔ミ身のまはりの整頓

○危険でない遊び方

○室内の歩き方等

以上の基礎的なものについて、それぞれ機會をさらへては正しい方向に伸ばしてあげたい。時によるミ先生自らの實踐態度によつて薰化感得させるものぞましい。

科學的芽生えを重んずる遊び のいろいろ (三)

東京市文海幼稚園長 岩 松 多 吉

(六)影によるもの

種目	取 扱 ひ の 中 心	備 考
影ふみ	一、光と影の關係に興味を有つ様色々遊び方の工夫 二、日向と日影の温度等も自覺	影に氣をとられ他の者に突當らぬやう注意
影ぼふし	一、朝・晝・午後の影によつて太陽の位置が變つたことを會得 二、太陽の位置に因つて影ぼふしの長短が出来ることも自覺	暑い・寒い・暖い・冷たい等の使用する言葉にも注意
影繪あそび	一、光と影の關係に興味を以て遊ぶ中に物の遠近により影に大小濃淡等が出来ることを自覺 二、物の向きによつて影の形が變化するので推理の芽生えを培ふ	影をうつす場面の選定

(七)雪・氷・霜によるもの

種目	取 扱 ひ の 中 心	備 考
雪合戦	一、雪にぎりして玉を作る 大きさ、かたさ 二、投げ方、遠くへ、近くへ 三、遊んだ後の體の暖さ	イ、雪の握れる時を選ぶ事(濡り氣ある時) ロ、しもやけの豫防 ハ、遊んだ後手足顔等の始末 ニ、元氣を出して雪合戦に加はること

<p>雪だるま</p> <p>一、大きく作る工夫 二、頭と胴の釣合、目口鼻の位置 三、日中になつて日が當つて来た時の雪のとけ具合</p>	<p>一、雪だるまの作り方指導をすること ロ、器具を使ふ時の方法 ハ、雪だるまを置く位置</p>
<p>雪うさぎ</p> <p>一、兎の形を工夫する 二、目・耳・口・尾の位置</p>	<p>糸の先に木炭をつけるとよく釣れる</p>
<p>雪つり</p> <p>一、どうすればよくつれるか 二、糸の長さ、下す時の力の入れ具合 三、びんな雪が一番つれるか 四、雪玉の大きさや重さ</p>	<p>草・木・畑などの霜除けするわけ</p>
<p>霜柱</p> <p>一、霜柱の観察、土の軟かい所、土の固い所 二、日中になつた時の様子 三、霜柱を踏んだ時の気分</p>	<p>一、天然氷の保存利用の話 ロ、氷の人造(夏でも作る) ハ、氷は病人に使ふことがある</p>
<p>氷あそび</p> <p>一、氷の出来と家の内外の状況 二、氷の薄い厚いの出来 三、氷の上はよく滑る 四、氷を地上に投げて滑らせる</p>	<p>一、階段の上りに注意する ロ、正しい姿勢で滑る様に注意する</p>
<p>(八)遊具によるもの</p>	
<p>種目</p> <p>取扱ひの中心</p>	<p>備考</p>
<p>シート あそび</p> <p>一、シートに乗つて遊んでゐる中に幼児の體重の輕重・釣合等を自然に知る</p>	<p>遊具を使用して遊んでゐる時には必ず監督者を要する</p>
<p>ブランコ あそび</p> <p>一、漕ぎ方の工夫をする 二、繩の長さによつて動く速さがちがふこと等自然に體得する 三、子供同志数を數へて代り合ひ等しく乗る 四、數觀念を養ふことになる</p>	<p>一、二人乗りは危険なる故禁ずる ロ、あまり漕ぎ過ぎないやう注意する</p>
<p>スベリ臺 あそび</p> <p>一、すべり臺の高底 二、すべり道の長短 三、すべり臺が濕つてゐる時乾いてゐる時のすべり具合</p>	<p>一、階段の上りに注意する ロ、正しい姿勢で滑る様に注意する</p>

(九) 器物によるもの

種目	取扱ひの中心	備考
積木遊び	<p>一、積み方工夫 高く積む、丈夫に積む、面白く積む</p> <p>二、重心の關係</p> <p>三、積木の種類大小・形状・重さ</p>	<p>イ、積み方は面白く工夫すること</p> <p>ロ、器材を亂暴に扱はぬやうにすること</p>
毬つき	<p>一、毬の形と大小</p> <p>二、ごんな毬はよくはすむか</p>	<p>イ、毬を大切に取扱ふこと</p> <p>ロ、ゴム毬の空氣がぬけた場合どうなるか</p>
鳴物遊び	<p>一、樂器の種類と其の音特徴</p> <p>二、樂器でなくとも扱ひ方でよい音が出るもの</p> <p>三、金屬類の音・瀬戸物の音・木片の音・太鼓・弦の音の鑑別</p> <p>四、なるべく良い音を出す工夫</p> <p>五、拍子なとりリズムの正しい把握</p>	<p>イ、鳴物遊びをする中に音に關する興味と理解を起すやうにすること</p> <p>ロ、樂器の性能をこはさぬ様に大切にすること</p> <p>ハ、樂器使用の場合、樂隊遊びと聯絡する</p>
羽根つき	<p>一、よく廻る羽根とよく廻らぬ羽根</p> <p>二、よく廻る様にする工夫</p> <p>三、どうしたら高く上るか</p>	<p>イ、危険のない廣場で羽根つき遊びをすること</p> <p>ロ、羽子板の使ひ方</p>
輪なげ	<p>一、投げ方工夫</p> <p>二、姿勢・輪の持方・目のつけ方</p> <p>三、適當の距離と成績</p> <p>四、入つた數を數へる仕方</p>	<p>イ、使つた後は輪の數を調べ整理し置くこと</p> <p>ロ、先を争はず順番を待つこと</p>
蟲めがね遊び	<p>一、どの位に目から離したら一番よく見えるか</p> <p>二、眼に近くよせて見た時段々離して見た時</p> <p>三、太陽の直射光線を集める事の工夫</p> <p>四、黒と白とどつちの紙が一番よく焼けるか</p>	<p>イ、紙屑を散らさぬ様にすること</p> <p>ロ、作りたる焦點にて衣類をこがさぬこと</p>
鏡遊び	<p>一、鏡に物をうつすこと</p> <p>二、顔・手・花・他の人・物等</p> <p>三、鏡を顔から遠く離れた時</p> <p>四、太陽の直射光を反射させる</p>	<p>イ、鏡はこはさぬ様に取扱ふこと</p> <p>ロ、平面鏡を良く拭き置くこと</p> <p>ハ、凹凸面鏡等も使用せば興味あり</p>

磁石遊び	<p>一、ごんなもの吸ひ付いたか 二、磁石のごくに吸ひ付いたか又その吸ひ付く様子 三、砂場で砂鐵を探してそれで遊ぶ</p>	<p>イ、金屑を入れた箱あれば利用す ロ、磁石の磁力を弱めぬ様に取扱ふこと ハ、器物の後始末は特に注意すること</p>
(だるま)	<p>(一)磁石で踊らせて遊ぶ (二)どうして起き上がるか</p>	<p>これに使用するダルマは底に鐵のついてゐるものだけにす</p>
(金魚つり)	<p>紙で作つた金魚に針金や釘をつけて釣竿につけた磁石で金魚釣りの競争をする</p>	<p>各自に金魚を作らせ手技との連絡をもはかること</p>

(一〇)其他によるもの

種目	取扱ひの中心	備考
摩擦遊び	<p>一、摩擦によつて熱が起ること 手や顔を磨ること、机上を磨ること、マッチはこの應用(冷水摩擦・乾布摩擦の話) 二、摩擦によつて電氣が起り物を吸ひ付くる場合</p>	<p>イ、手・顔・足等を摩擦させる ロ、机上を強く摩擦する事 ハ、ゴム櫛・エボナイト等手近な物を以て實地にやつて見せる 机上の洋紙をこすれば吸付く</p>
相撲遊び	<p>一、ごんな場合に倒れるか 二、倒れない工夫 (重心を失はせない様に工夫する)</p>	<p>ホール紙・畫用紙・古ハガキ等を使つて作る クレオン・色鉛筆にて彩色する</p>
こままはし	<p>一、心棒の位置(重心) 二、廻る時の色 三、廻し方の工夫</p>	<p>ホール紙・畫用紙・古ハガキ・ヒゴ竹・ヤウシ等を使つて作る、彩色する</p>
やじるべ	<p>倒れない様にする工夫 (重心を自覺させる)</p>	<p>ホール紙・畫用紙・古ハガキ・ヒゴ竹を使つて作る</p>
電話ごっこ	<p>一、音波の振動(パラフィン紙がビリ〜となる) 二、糸を傳はつて来る聲 三、聲の傳はり方、筒のある時、筒のない時</p>	<p>材料 竹筒又はホール紙筒・パラフィン紙・絲</p>

<p>あぶり出</p> <p>一、あぶると段々ものが現はれる</p> <p>二、薬品の附いた部分と附けない部分</p>	<p>一、紙・明礬を材料とす</p> <p>ロ、火鉢の取扱ひに注意すること</p>
<p>はかり遊</p> <p>一、重量によるもの</p> <p>1、重さの比較</p> <p>2、分量と重さとの関係</p> <p>3、數觀念の養成</p> <p>二、容積によるもの</p> <p>1、液體は器によつて形が變る</p> <p>2、器の大小によつて容積が異なる</p>	<p>イ、砂・土・粘土・玩具等にて實驗觀察</p> <p>ロ、水・色水等にて實驗觀察</p> <p>ハ、シュー・遊びと聯絡すること</p> <p>ニ、後始末に注意すること</p>

本稿は東京市保育研究會觀察部委員が東京市より命ぜられて研究、昨年十二月發表したものである。

一八頁より)

様躰しなければならぬのであります。習慣等は一夜にして完成するものではありません。毎日々々、その時その時に注意し根氣よくしてこそ、完成するものです。さうしてもなほならないさあきらめる時に、もう一度さ振ひ立つてみませう。完成は目の前です。立派な躰をして、心身共に健全に發達せしめ、將來立派に御役にたつ日本人になる様保育する事こそ私共の使命であります。以上數々の躰けの要項を列擧しましたが、何れも諸姉の既に御實行の事のみ

ご思ひます。躰けく、ご呼ばりながら、自らも又環境もそれに反していたならば、お膳立の無いお食事と同じで、決して好い躰けは出来ません。それゆゑこの數行によつて、反省をうながせるならば何よりさおもつてをります。

【誌上講習】 幼兒の生理(二)は都合により休載

編輯部

中支の一隅より

漢口日本國民學校附屬幼稚園

福 山 隆

倉橋先生を始め幼稚園協會諸先生の御指導を遙かに仰ぎ乍ら長江岸の一隅に保育報國の一翼に参加させて戴いて居ります。漢口の地に参りましてからは僅に九年の月日を経たに過ぎませんが願れば其の間唯、日々の仕事に忙しく暮し來たのみで何等の報告もものせずに過してしまひました。今となり筆を執りましてもさして變つた事實を申し上げ得ない事をお恥しく存じます。次に記します事はほんの輪廓的な事柄に過ぎませんが以て他山の石ともなれば幸甚の至りに存じます。

皇軍の鮮血をもて朝敵抗日軍を追ひ拂ひ、中支各地に打ち立てられた日章旗の下、集ひ來し同胞の子弟教育機關が事變以前に比して其の數、其の内容に於て隔日の相違ある發展を見ました事は今更申上げる迄もありませんが、國民學校、中等學校の強化發展と共に、中支の保育は如何様に成長しつゝあるかを鳥瞰する事は、一つには保育全般の反省にもなり、一つには自己の在り所の自覺ともならうかき、十七年末迄に各地國民學校長から回答を得た材料に依つて公私立別に一覽表を作つてみたわけです。公私立別にした

理由は各地の保育への關心が政治的教育的な立場から大體そんな方向を示してゐるかを知らに便利な一方法ださ考へたからでした。私立を私立として排する様な偏見からではありません。然し經濟的理由を第一に擧げなければならぬいでせうが國家の手が直接保育機構に迄觸れて行く前提として各地國民學校に附屬した幼稚園が陸續として生れ出る事を私は切望して居る者です、そして、それは保育方針の統一と内容の向上を意味するものださ云つても別に差支ない事ださ考へられます。勿論私立幼稚園に立派なものが多い事はある事はわかつて居ますが全般的に云つてさう云へると思ひますので先づ出来るだけ多くの附屬幼稚園が國民學校に附設されることを希望いたします、此の表はさうした見地から一瞥の觀點を定めたわけでした。

要 項	公立幼稚園		私立幼稚園	
	幼 兒	保 姆	佛 基 社 商	佛 基 社 商
園 數	1	1	1	1
内 鮮 臺 計	1	1	1	1
訓 保 保 代 保 計	1	1	1	1
系 系 系 系	1	1	1	1

漢口	武昌	大冶	九江	安慶	蕪湖	仰甲	蚌埠	馬鞍山	揚州	嘉興	鎮江	南京	無錫	常州	蘇州
一七八							一二六				一四〇	一八八	一三九		
二二二							二二八					二二二	四		
六〇六							二五六				四〇	二九二	六四九		
一											一	一	一	一	一
二												四	二		
一											一	一	一	一	一
三											二	六	一	一	一
一															一

休園
中園

尤も中支地方には最近漸く國民學校の出現を見た所も少くなく、従つて保育機關の公營に迄は未だ手の届かぬ事情にある地方もある事を知らなければなりません。右の表に見る通り中支の保育現狀は未だ盛んなものではありませんが此れを興す者、深める者は何ミ云つても現在保育に當つてゐる直接者の奮闘に基本を置かねばならないでせうし、保育者其のものゝ努力に依つてこそ環境の反響を呼び起す

事が出来るミ考へなければなりません。

元來保育の重要性ミ云ふものは中支に限らず一般には各種な角度から考へられ、それだけに漠然とした傾向を持つて居たミ云ひ得るでせう。其の宗教的或は單なる託兒的な意圖から生れ出でた幼稚園ミ云ふものが、莫然とした目標の下に營まれた傾向も否めぬ事實であり、又直接の保育者も果して明確な民族的意圖の下に保育生活を營んだか否かは眞面目に反省されなければならぬ事實であつたミ云ひ得るでせう。されば社會一般が保育の重要性ミ云ふものを左迄知らうともせず、結局莫然たる認識の裡に濟まして來たことは一方的な結論にはなつても一理由をなすものとも云ひ得るであります。

然し、過去の事實がさうであつたにせよ、教育が、大東亞の中樞たる日本人を育て鍛へ、一人の無能者をも残すまじき意圖する時、保育もその一翼に在つて、幼児性の充實の上に、幼兒を總動員して民族的な出發が實行されなければならぬであります。即ち幼稚園は幼兒を楽しく遊ばせる所に止らずに、此の期の兒童に與へ得る教育の効果を民族的意圖の下に與ふべく計られなければならぬであります。

そして其の機運を促進するものは直接保育者の提携であり眞摯な努力に俟つ以外には無く、中支の保育を成長せし

めるもの亦中支の保育者の自覺にあることを切々教へられる次第でございます。

二、漢口市内の保育概況

當市内には邦人側に二つの幼稚園があります（在留民約八千）一は東本願寺別院經營のもの、一は當附屬幼稚園で、當園は創立明治四十年、爾來一再ならず事變の爲閉鎖等の消長史を持つものですが現在には御稜威の下、英系接收建築物を與へられて次第に歩みを堅めつゝあります。

尙ほ中國側に就いて一言觸れますれば、今、市内に附屬幼稚園が四あり、第一、第六、第九、第十一小學校に附設され中流以上の幼児の中から希望者だけが收容されて居ります。此等の幼稚園は皇軍入城の翌年に新な意味で出發したもので此の發足には及ばず乍ら當幼稚園も參劃し現に働いてゐる保姆達は兎も角も一應保育目的並に方法に就いて當幼稚園に做ふ用意を了へて巢立つた中國人達で、近い所に在る第一小學校の附屬等では年に二回程當園に全幼児が遊びに来て一日を共に戶外に遊んだり遊戲唱歌等で楽しく過して歸る事がありますが、幼児達はお互に玩具を貸し合つたり、ブランコを揺つたりして小さな交遊を遂げるわけでありませう。將來も尙ほ此等の幼稚園は提携を續け重心に結ぶものあることを希ふ次第ですが、斯うした事こそ急いでではなく焦つてはならないと注意し乍ら少しづつ實踐

して居る現状でございます。

三、當園の近況二三

國民政府が參戰宣言に明示して居る様に、昨十七年秋には重慶を援助し自己の勢力を支那大陸に植ゑて日本本土空襲を企圖した米空軍が先づ占領地帯に對して神經戰を開始した事は皆様御存じの通りですが、其の頃、夜もなく晝もなく頭上に大音響を聞いた幼児達は戰爭の現實性を身近に感じた事は勿論、米英蔣への撃滅の情燃え上る者がありました。直撃彈を受けたらそれこそ處置なき運命と定め、防空壕も何も無い所で最善の場所を選んで避難の實演をしても幼児は云ふ者は案外に驚いたり泣いたりする者ではなく、一所に皆で集つて凝り経過を待つてゐる中に、とても堪らないと云ふ風に歌をうたひ出す者があつたり、角力を始めたりして二度や三度驚かされた位では缺席者の數も増さない有様でした。「ナーニ負けるものか」等話し合つてゐる男の兒もあれば「軍が追ひかければすぐ追ひつくねえ」等と安心してゐる女の兒等があり、何時もはなく何處もはなく、全く皇軍を信じ切つてゐる幼児達の心の態を判然と見せつけられた思ひに、私は御稜威の有難さ、神のみ軍の強さに涙熱い體驗を致しました。これからも絶無とは云ひ難い斯うした敵の企圖にも、私達は死なば諸共、日本人たるの光榮に強く明るく幼児達を育て、行き度いこ考へて居

ます。

「米國の軍艦を皆沈めてしまへ」こ幼児達は其の頃盛んに菓子箱の反古で飛行機を作りました。「自爆だ」云つては敵艦目がけて突入して行く友軍の飛行機の姿が、畫帖を埋めて猛烈な筆勢で畫されました。勝たなければならぬ意義が神經戰の裏をかつて幼児の胸にも燃え上つたことは、表現に複雑な技巧を知らない彼等ではあつても、朝毎の宮城遙拜に棒の様に直立緊張して一生懸命に最敬禮をする姿の上にも見出す事が出来ました。

しかし、あれから敵機の姿を見る事も稀になつて、緊張の裡にも長江に一日一日水量の増し来る長閑な春を迎へました。

次には極く平凡な事ですが昨秋以來兒童の晝食を炊いて幾分でも健康増進に資し度い願ひから、職員が中心になり支那人使丁の協力を得、保護者側からの當番奉仕の助力を合はせて、現地米の糊氣のないお辨當が不消化になり易い不安から、炊きたての消化のよい晝食を一週間に五日間づつ實行して來た事に就いて御批判を仰ぐ事に致します。大體海外に來てゐる邦人は内鮮臺共に大して生活に困る様の人達は無いので榮養不良に陥る場合は食糧の不足からではなく偏食に依るものが大部分である云つて差支ありません。その他には唯前述の様に現地の米は内地の挽割麥の様

にボロ／＼糊氣の無い物が多く冷えれば箸にもかゝらない様な物になるのが普通なので民團當局の諒解を得、水と燃料を負擔して貰ひ、合作社の協力を得て割に良質の米を安價に融通して戴き蛋白質、ビタミン、灰分等の攝取を中心に脂肪、含水炭素の消化吸収に注意を拂ひ、市中のジャムバン二個乃至三個に相當する位な實費で榮養晝食を實施して見ました。これ迄は當園が日本租界内に在り大體租界に住む邦人の子弟が通園してゐた關係から辨當が冷えて不消化になる様な心配も餘り無かつた事でしたが今は各家庭から相當離れた所にもあり、建物が事實上獨立した爲、さうにか間に合ふ炊事場等もあつたのを幸、今年初めての試みでしたが目の廻る様な忙しい思ひをした效ありしとも言ふ可きか、偏食等は割に事なく矯正せられ、食慾も増したが多く道具の片付け其他兒童の自治的生活の方面にも良好結果を來たしました。

保護者中には種々の職業に従ふ人々があるので材料調味料等の蒐集に奉仕して下さる方もあり經費の點からも無理がなく官衛、保育直接者、保護者の共同事業として微少な歩み乍ら養護に一步踏み出した事は嬉しい經驗でした。

二月中の獻立及經費を記して見ます。次の通りで御座います。日計表も一部附記致します。

週 三 第			週 二 第			週 一 第			週 日				
金 19	木 18	水 17	火 16	月 15	金 12	水 10	火 9	月 8	金 5	木 4	水 3	火 2	月 1
白飯、粉雑魚	まぜ御飯、牛肝、蓮、人蔘、海苔	白飯、粉雑魚	小豆飯、黒ゴマ	白飯、粉雑魚、きなこ	白飯、粉雑魚、きなこ	白飯、粉雑魚、きなこ、油揚、人蔘、蓮、グリソ、ピース	白飯、梅干	白飯、粉雑魚	白飯、粉雑魚	白飯、粉雑魚	まぜ御飯、牛肝、人蔘、蓮、焼海苔	白飯、粉雑魚	小豆飯、黒ゴマ
				豚汁 (大根、人蔘、里芋)	豚汁 (大根、人蔘、里芋)	味増汁 (雑魚、わかめ、里芋)	味増汁 (雑魚、大根、豆腐)	味増汁 (葱、大根、人蔘、里芋)	味増汁 (雑魚、大根、豆腐)	味増汁 (里芋、大根、人蔘、豆腐)	味増汁 (野菜煮しめ、野菜煮込)	味増汁 (雑魚、大根)	味増汁 (雑魚、大根)
同前	挽肉(牛) 菠薐草 煮込み	同前	白菜	白菜	白菜	同前	白菜	早漬	同前	同前	同前	同前	白菜

週 同	週 木	週 水	週 火	週 月
26	25	24	23	22
小豆飯、黒ゴマ	きなこ	まぜ御飯、野鴨、人蔘、海苔	白飯、粉雑魚、きなこ	白飯、粉雑魚、きなこ
豚汁 (大根、人蔘、菠薐草)	清汁 (鴨カラ、菘菠薐草、豆腐)		煮豆 (大豆、甘藷、昆布)	野菜煮しめ (雑魚、人蔘、大根、里芋)
早漬	早漬	白菜	同前	早漬

夜は一般に動物質の材料を使ふ傾向にあるので晝食は出来るだけ植物性の材料を用ひ、血液の中和を計る様努めました。毎週同じ様な献立を繰り返したに過ぎませんが現地も今は物價も高く、材料の種類も少く確實に手に入る見込みの材料を豫定し、時間を長くかけずに、簡単な調理法で出来る副食物をさ心掛けたため、右の様なものになりましたが、校醫や保護者中の醫師にも相談の上、見掛けよりも質に重きを置く事として、華々しい料理を作る事を目標には致しませんでした。

右の献立に依る経費は次の通りでした。但し水道料、燃料代は民團負擔、人件費は計入しません。使丁三名はこの爲に雇つた者ではなく園の仕事全體の爲の者、職員はもこより保護者の當番も奉仕であることは申上げる迄ありません。

曜	日	實費	出缺
	1	19 錢	
	2	19 „	
	3	18 „	
	4	28 „	
	5	18 „	
月火水木金	8	16 „	
	9	17 „	
	10	24 „	
	12	25 „	
月火水金	15	19 „	
	16	19 „	
	17	28 „	
	18	20 „	
	19	28 „	
月火水木金	22	24 „	
	23	20 „	
	24	23 „	
	25	16 „	
	26	27 „	
合計		408 錢	

日計表の例

終りに建國神話書を漢口高等女學校の應援を得て圖書の講師の執筆を仰ぎ民團經費約一千圓を以て作製、横二尺二寸、縦一尺七寸程の額物とし建國神話筆に收めました。もごより此の畫額集は完全な物ではないかも知れませんが當地皇道文化協會の指導の下に大過無き物と自信する事が出來ます。

一、國造り 二、天岩戸 三、素佐男命 四、大國主命 五、國讓り 六、天孫降臨 七、海幸山幸 八、神武天皇等、二十枚程になりました。全部日本畫法に成り、紀元節前後を特に神話を取扱ふ期として、週三回程度に話を繼續的に取扱ひ、其他は大祭祝日等に鑑賞させる計畫で居ります。當園は一年保育なので入園當時には唯畫額集を見學させるだけにして置いて第三保育期に入つてから話してきかせることに致しました。尙、保護者側と連絡を進めて、各

家庭でも神話を話して聽かせて戴く事を御願ひして居ります。

建國神話等云へば誠に堅苦しい話で幼児には過重な負擔の様に主張なさる方もありますが實際撥つて見て幼児云ふものは決してそんな存在ではないと思つて居ります。彼等は單純で、全く純粹で、而も直觀的で神話の如く神秘的な話を語り聽かせるには無二の時期にある云つてもよいと云へ思つて居ます。

私は神話を暗記させる事に依つて國史の早教育をしよう云ふものではありません。桃太郎の鬼ヶ島征伐、浦島太郎、かち／＼山等の話を素直に受け容れて居る幼児達に最も本質的な傳統の根源、遠つみ祖の民族的信念を素直に呼吸かせ、皇御民なる生命の底に天之御中に在す御光籠りて溫暖給へし只祈る者に外ならないのであります。

神話はすつこ以前から二月の豫定に織り込んで扱つて來ましたが幼児達は目を見張つて聽いて呉れ特に繪を見せる様になつてからは見る事夫れ自身を非常に喜んで何遍でも見たがつて居る様です。

以上の外、尙指導を仰ぎ度く考へて居る事柄もあります。が次回に譲りまして駄言を止めます。協會の諸先生、全國の皆様御健康をお祈り申し上げます。

おもしろごと・動物園

—— 入園當時の誘導保育の主題 ——

東京市東郷幼稚園

よい誘導保育をすることは難しい。しかし難しいと思つて遠ざかつてしまふよりは更手が出ず、おつくうになつてしまふ。せつかく子供等が、その遊びの中に、生活の中に、

示してくれる主題をさらへて、大がりのものではなくとも度々誘導保育を試みたいと思つてゐる。かう書きながら私は自分のこゝにしるさうにしてゐる経験が本當の誘導保育だと思ひ切るこゝが出来ない様な氣もするし、度々の経験で色々な疑問やら失敗やらをふやしてもゐる。

年少組、それも新保育期では子供等の遊びもまだ動きが少く、すべてにまだ力がないのだからあまり繼續的なこゝや複雑なプランは立てられない。一番ひくいこゝろに標準を置いてきの子も遊べる様に、みんな子供も一緒に出来る様に自由遊びの中からばかりではなしに設定保育の様

形からこの誘導保育の形へ子供をつれて行くと思ふこゝもして見た。

四月なかば、雨の日、(二年保育の幼児二十名)

二人程、前から在園の幼児まゝこのお皿をならべ、「お食堂ごっこ」を稱するものをはじめてゐる。そこで、他の子供等を集めて、みんなで御馳走をこしらへるにこにする。キビカラ細工、キビカラを鋏で切りヒゴを通す仕事キビカラを切り色紙で包むこゝろ。これでおもしろいお園子センターが出来上る。二三人が働き手となり他はお客様、唯これだけでこの時は別にこれ以上發展はしないでしまつたが、大ぜいで、ましまつた遊びをするこゝのまだ出来なかつた子供らはこれでも満足しきの子供もがよろこんでこの遊びの中に這入つてゐた様であつた。

五月はじめ ある晴れた日。

綱を用ひての電車ごっこ

雑草のある空地での遊び

前にしたここのあるキビカラの遊びご

砂場でのおだんごこしらひ。これらをまきめて、子供等の大好きなえんそく遊びを仕様考へる。

雨上りの砂はよくにぎれたからこれを用意して置いた古葉書利用の経木代用品に包んでおべん當をこしらへた。勿論包めば、あはれはかないつぶれ方はしたのだけれぎ。これをハンカチーフにキビカラのキャンデーと一緒に包む。

細引の電車に乗つて路ひごつへだてた空地へ出發。五十坪にも充たないこの空地には雑草のみざりがある。蝶がこび、小さな空色の花が咲き、タンポ、さへ小さいながら白い綿毛をまばす。コンクリートの庭に比べて、なんぞ豊かなところか。子供らは大切な兵糧もなげすてる様にして、あちらへ走りこちらへこび、小高いところへ上つては両手をのばして歓聲をあげる。さて、おべん當もなれば砂でもキビカラでも子供たちは集つた。お砂のおにぎりもふりまいたここも、キビカラのキャンデーを本當に口の中へ入れた子供があつたのには少し困つた。砂は大した量でもないからその空地へ寄附をした。おべん當のあき、紙の始末、そ

れがこちらのみそでもある。こんなここでひまかき公德心の育ちへ助力したなき、よい氣であつた紙までもきれいにし、石迄も片附けた。ブーン／＼爆音勇しく百パーセントの輸送能力を出した男の子も幾たりかあつてこの空地の清掃作業が出来てしまつた。小さな雑草を兎の餌にこつて歸る。

砂のおにぎりを包んだハンカチーフを洗ひたかつたがこれは出来ずにしまつた。

五月末日 曇り日

室内に椅子を並べての電車ごっこ。これから動物園ゆきに發展させ、動物園遊びをさせ様もくろむ。

電車の切符、動物の餌

お人も
おせんべい

製作

動物の標本を戸棚から出して並べる

——サクや檻をこしらへる仕事——

これは相當によく發展しうまく行くだらうとはじめたのだつたれぎ反對の結果に終つてしまつた。誰は車掌さんになつて、誰は動物園の餌を賣る人になつて、ミ先生が指圖をし、あゝし様、かうし様ミ先生の考へで子供を引つぱり過ぎた形であつた。こちらの計畫それも、この子供等に

しては複雑過ぎる組織へ子供は引つぱられた形となり、落ちついた「あそび」の気分が少し少くなつたことに気がついた頃、誰か切符をさつちやつた一人が泣き出す。誰ちやんがライオンの檻をオサルのころへ持つて行つた一人が怒る。何さなく子供等の気分が粗くなつてしまつた様で案外楽しくなく終つてしまつた。先生も疲れたし子供もつかれた。これは誘導保育を仕様として強制保育をしてしまつたさ、私はその日一日楽しくなかつた。四月のはじめ、遊動木を電車にして、さあ動物園へ行きませうさ、まだお友達もなくてゐたりする子供を集めてした時の方が却つて面白かつた。子供自身がお猿になつてシャングルジムの上でキャッ／＼やつたり木の葉を切符や餌にしたり、今度大積木やお庭の遊具を使つて面白い動物園遊びを計畫してゐるのだけれどさかくちちらが動き過ぎ子供等自身が動かされる結果にならぬ様、ここに年少組では注意してうまくやり度いものさ考へさせられてゐる。

さにかく、あまりこちらの考へでたくさんの計畫をし次次ミ繼續發展させ様ミ望み過ぎては駄目である。手技を取り入れるにもあまりにそれが難しかつたりするミ肝腎な處で面白さや意氣込がにげてしまつたりする。

(三八頁より)

し、はたの目にも羨しい程、生々とした喜びの生活になつて依る。その生活形式が全く意識に上らず、生活内容が子供達の生活核心となり、精神的內容が子供達を支配し、子供の生活は段々高められ深められて行く。この速度の早く、生活深究の程度の高まりは驚くべき早さで進められる。

その日の先生の御話を私達に得意になつて話してきかせる。習つた唱歌を歌つてきかせる。

「まだよく覚えなないんだけれど……」

と、前置きして歌ふときなどは最も楽しさである。今日は「斯々のお遊びをした」と一日の愉快さを語る。繪畫、手工等の製作品を持ち歸つて見せる。

「これはあんた描いたの……、本當かしら、仲々うまいね」
とからかひ作ら褒められる。長女はニコニコしながら自作なること主張する。

「これは飛べるかな。隼はやぶさかな」

と、自作の紙飛行機を批評されると、自信ありげに

「飛べるさ。飛べるとも」

と、長男は自己の創作意圖を堅持する。
斯くして、環境全體、生活全體に自己を融合没入し得て、周囲と自己との聯繫に人間の溫さが醸成される頃になればその喜びは益々深まつてゆく。

長女「私の先生は○○先生」

長男「僕の先生は○○先生」

と、師の名をはずきりと固有名詞で呼ぶやうになり、その感化愛護を感じ、そこから湧く師への限りなき敬慕と絶大なる信頼を持つやうになる頃子供の歡喜は極頂に達する。

(昭和十八年四月四日)

入園の喜び

櫻井勝三

親の喜び

不安

「駄目かも知れません」

と妻が力無く溜息をつく。その調子に通り込まれて私も覆ひきれぬ不安を感ずる。入學とか入園には必ず合否と共に不安かつき纏ふ。終日入園検定に附添ふた妻の述懐によれば、精神的發達の程度は「まあ」といふところだが、身體的方面の検定には全く自信がない。

「第一體が小さいし、痔せてゐるし、よその方のやうに元氣よく階段を上つたり下りたり出来ないし、鬼ごつこのジャンケンなしても直ぐに駈け出さないし………：こんなだと思ひませんでした。根本的に考へ直さなくては……」

と、愈、不利な陳述をする。今後の養育上の決意をはのめかす。眞に悲壯である。

私も社交性がないのは陋巷に住ひ良いお友達
のなかつたせいかと考へて見る。

長女の發育狀態の悪いことは私達の最大の心配であつた。それでも三人の子供の中、一番丁寧に育て、最も細心の注意を拂つて育てた心算である。若いもののみ家庭では精一杯の愛育をした心算である。乏しい生活の中にも本當に丹精して育てたと云へるのは長女である。それが短身軀瘠今日の憂目をみるとは。

長男は發育程度は長女より良く、既に入園検定についても長女の経験により多少は免疫性も出来、少しは氣が樂であつた。然し妻は依然、

「よそのお子さんのやうに元氣に駈廻らないし、いつもの家での調子が出ないのです。」

と、長女の場合と同様述懐は憂色を漂は

す。

喜び

「綠殿検定の結果當幼稚園第二部に入園を許可いたします。」

急に世の中が明るくなつたやうな氣がし、肩の骨がゆるんだやうで、又急に空腹を感じ出した。ちつと葉書の文面を凝視し、繰返し讀んだ。晩には神棚に燈明を上げ、子供と共に神拜し心から神恩を謝した。

この喜びは子供の誕生の時の喜びを遙かに凌駕する。我が子が初めて世の試練にまみえて合格し、我が子の眞價を初めて世に問ふてそれが是認せられた。我が子が生を受けての最初の誠金石の試練に勝ち得たと思へば親の喜びは限なく深い。

長男の場合も亦その喜びは同様であつた。

入園後の我が兒の伸びゆく姿を見てゐる喜びは、入園を許可された時の激しさはないが、靜かな中にも力強く、徐々ではあるが遂に溢れるといつた喜びである。

子供の喜び

憧憬

漠然とではあるが附屬幼稚園に對して憧

懐を持つてゐる。運動會を見に行つたり、その他時々構内を訪ねる機會もあつたせい、入園の希望は持つてゐたやうである。

長女の

「女高師幼稚園はとつてもいいところ、早く行き度いなあ」

と云ふ片言にも分る。

長男は長女の送り迎へに一緒につれ立つて時々行つたので、長女以上に附屬幼稚園に對する認識と親しみと心安さを持つて居つた。

そして長女と共に幼稚園に通ふものと決めてかゝつてゐた。絶えず長女の幼稚園生活を羨しがつてゐた。

然し長女、長男共に、入園検定日も、平常と大した變りなく、一日の緊張のせいか就寢が早い位のもので聊かの心配も不安も感じてゐない。これでこそ親も助かると思つた。又入園を許可された旨を教へても大した歡喜の情も現はさない。

順應

長女は入園當初は、生活形式が異り、又環境様相が變つて、而も小社會の成員として、その生活に緊張と努力を伴つたらしい。

そのため相當の疲勞感を伴つて歸宅する日が續いた。勿論毎朝嬉々として勇んで家を出て行き、通園を心から喜んでゐた。然し環境に順應し切れず、警戒心、顧慮の極精から完全に脱却し得ないものゝやうに思はれた。不安もなく懸念もなく、全く環境と融合し得たのは一學期も終りに近づいた頃のやうに記憶してゐる。優しく又順應性を多分に持つてゐると思つてゐた長女の方が長男より環境に順應し切るには遅かつた。

これは男女の別と云ふよりも長女の何處か自我の強いやうに思はれることに基因する長女特有のものかも知れない。

長男の環境順應は長女に比し遙かに早く、旬日を出でずして環境に融合してしまつたやうに思はれる。長男はがむしやうで、仲々の強氣なのでお友達との折合が氣にかかつた。然し反面妙に内氣のはにかみややでもあり一見矛盾した性格を具有してゐるやうでもあつた。入園當初の長男の行動につき長女が断片的の報告をもらす。

「今日段々(お部屋からお庭に出る石段)の處で指をくはへて立つてゐた」と孤立的生活を知らせる。

「今日は鳥小屋の前でぼんやりと鳥ばかり見てゐた」

と。無氣力に己自身鳥のやうにしよんばり佇立してゐる様子が私の頭の中の映幕に大寫しになつて明瞭に映じて来る。

「彬ちやんは今日も私のお部屋をのぞきにきた」と、報告する。「これは大部生活に能動性が現はれて来た」と密かに喜び安心する。

「今日ものぞきにきたし、世話が焼けて仕様がなない」

と、長女がこぼす。「これは姉弟大部相互依存をやつてゐるな」と又安心する。

出だしはぎこつちなかつたらしいが、案外順調に短期間に、長女に比し五分の一位の期間で順應し切つたやうである。

歡喜

「幼稚園の生徒さんがそんなにぐずつていゝんですか」

と、たしなめられる頃になると、或る自覺と自尊心を持つようになる。「幼稚園の生徒さんが云々……」と、その體面を問はれるやうになると、本人達の幼稚園の生活は身につき、完全に順應し切つて、環境に適應

大東亞戰爭必勝完遂

幼児の母



昭和十八年

五月

幼稚園と母の時間

戦時下、母の時間は忙しきで、一ぱいです。家の中のことにして、物の便利のふんだんな場合にくらべて、時間のかかることが多くありました。それに加へて、隣組のこと、町會のこと、その他、時間に關してのいろいろのこと、家の外への用務も多くなりました。しかも、その間で、母の時間を最も用るなければならぬのが、我子の爲であることに變りはありません。

我子が幼稚園に通ふやうになつて、この忙しい母の時間は、一日幾時間と餘裕の出来た筈です。工場勤務に忙しい母達のために、工場托兒所があり、田植、刈入れの多忙季節の農村に農繁期托兒所が開かれる理由には、母の時間へのたすけといふことが、はつきりと含まれてゐます。幼稚園の場合では、子どものよりよき保有的なためといふことが、主の目的になつてゐますが、母の時間への都合のいい結果はいふまでもありません。

その、幼稚園によつて、すけられてゐる母の時間が、どう有利に、意義深く用ゐられてゐるでせうか。おのづとそうなつてゐることは素よりとして、それが、はつきり意識せられ、こまかに計算せられしつかりと活用せられなければなりません。その時間は、我子をはり、我子を人に托して、それで得た時間の餘裕を、うかゞと過したのり、我子を人になく消費したりして平氣な母があつたら、幼稚園は、その子を送り歸りたい位です。

幼稚園から

○お子さんも、だぶ幼稚園におなれに
なりました。ひとりでよく遊ぶといふよりは、みんなとよく遊ばれるようになりました。これでこそ、幼稚園が身につけてきたと申すものです。

○入園二ヶ月にもならない今日、幼稚園として、こま／＼とした躰なども、まだきびしくしてはゐません。しかし、見てゐますと、ほんどうに感心する程、我まゝをせず、だらしない亂暴もせず、立派にちやんとしてゐられます。仲間同志といふことは、こゝろに、なだらかに訓練をするものかと、今更思ひます。

○その中で、かわいそうなのは、遅刻をよくしたり、持ちものを忘れたりして、みんなと同じになりにくい子です。入園二ヶ月、もうそろ／＼、初めの熱心と心づかひがゆるまれたかと思ふ家庭の子です。お子さんが、おかわいそうです。その反對に、一日々々行届いて来て下さる家庭の場合、お子さんは、仕合せだと思ひます。

我子の性質

倉 橋 惣 三

毎日お世話さまになりました、有り難う
つてゐらつしやるところに、我子が、ぞん
なにかといふことを、初めて知りました。

「いゝえ行届きませんで。それにしてもよ
く幼稚園において下さいますが、幼稚園に
就て、何か御感想なり御注意なり」
「さようですか。」

「どういたしまして、私どもに、そういふ
ことは何もございませんで」
「若にて、我子ばかり見てゐますと、それ
が少しも分りませんで。親の怒目で、

「それでも、お子さんを幼稚園にお入れに
大層いゝ子に思つてみたり、親のあせりで、
缺點ばかり目についたり、それがまた、こ
つちの氣分で、いろ／＼變りましたり、つ

「はあ、ございます。私に我子の性質があ
り／＼と分つて参りました」
「えませんで」

「なるほど」
「御もつともや」

「お聴しいこととてございます、あの入園
の日に、子どもを連れて参つて、大勢のお
子さん方の中で我子を見ました時、世間に
はいろ／＼のお子さんがあるものだと思つ
て思ひました。そして、我子とそれ／＼違

(文部省推薦圖書)
ポクトポチ(五―六歳)

黒崎義介畫・文

此の繪本は、子供とその愛犬ポチとが
仲良く遊び暮す一日の生活を描いたもの
で、朝のラジオ体操から始まり、お使ひ
に同道したり、一緒に兵隊ごっこをした
りする潑刺とした活動場面が、七葉の繪
に收められてゐる。

子供と犬の一つ／＼の姿態には、明る
い無邪氣さが溢れ、微笑みを禁じ得ない
ものがある。子供が飽かず眺め入つて、
自ら元氣な活動を誘發せられる所謂童畫
らしい童畫と言へよう。

大阪昭光玩具工業所發行(神田區旭町

一一) B五判 定價 三十錢

ツヨイコドモ(五―六歳)

黒崎義介畫
片野敏文

此の繪本の中に描かれてゐるごの子供
にも、裡に満ち満ちてゐるはち切れさう

お氣をつけ下さい、お家 の内でのお話を

東京市富士見幼稚園 山村きよ

生存競争のはげしい都會生活に加へて、最近の大人の生活は時々いやな空氣を醸します。買物の折に、人の大勢出入りする所に、又は乗物の中等で……ほんどに人を良くしてゐたら「自分だけ損する」のではないかと思はれる場合の多いことを痛感して情けなくなる時が御座います。心の中では、善良な行ひをしようと思つて居ても、煩雜な日常生活におされてか、言葉のやりとり、又は態度の表はし方にこんな場合を感じるので御座いませうが、子供等の世界にだけはこんな空氣を感じさせたくないものがございます。

幼稚園の生活の中で一番子供達の喜ぶ食事時、お辨當のお箸を動かしながらいろいろの話題がなげられ、な和やかな風景でございますが、こんな時に私共は子供等の話を通して御家庭の御様子や隣組のこと、又は世の中の空氣をも感じるのでございます。或女兒、隣りのお友達のお辨當を見て「あなたの家卵屋さん？」女兒「うーん」保姆「どうして」だつて毎日卵のおかずでも

の……又配給米の一番悪い時の頃、保姆が「上手に食べないど皆外へこぼれますよ」と注意した時ある女兒が「白いい、お米はみんな遺族の方達にあげるのね」保姆「そうよ、もうすぐ靖國神社のお祭りですもの、それから戦地の兵隊さん達にも澤山お送り返しなればねえ」と嬉しく言葉を返へし上げてましたが、こんな時、自然になつてくれました言葉の中にも、お母さんの日頃の細い心配りが察せられてほんとに嬉しいもので御座います。又時には配給物のこと、行列買の話等、相當世相に通じた話し振りを耳にして、思はず苦笑させられたり、概歎させられたりで御座います。大人同志の逼迫した話し合ひや、現實に起る生活の不自由さに、子供の耳をふさぎ、目を覆ふ必要はございませんが、現實をそのまゝに受け取らせ度くない場面も澤山にございませう。お母様の細い心くばりで、きれいに非常時氣分を知らしていただきましたなら子供心にも自然と感謝の氣持ちを起させることが出来ることゝ存じます。

又時にはお母様方も忙しい日常生活の中から、出来るだけ生活にうるなひを持たせ

るやうな和やかな話し合ひの時間を一日の内にも五分でも十分でも作り出していただき度いもので御座います。忙しいの餘り、なげやりの言葉のやりとりや、なげやりの生活態度が子供の躰の上に一番禁物であるといふことを充分お考へいただき度う存じます。言葉といふものは日常生活の上でほんとに大事なもので……個人／＼の品性を表はすものでございます。相手が小さい子供でございますからことさら丁寧な言葉を使ふ必要はございませんが、注意せねばならない日常でございます。無意識の内に發する言葉がだん／＼習慣となつて個々の品性にまで及ぶものでございます。大勢の中には幼稚園に出したために言葉が悪くなつたと申される方もございませうが、これは今までの家の中にばかり居た方が急に社會に出てい／＼耳新しい言葉を聞いて得意然と使用する時機のあることをお含みの上、こんな時こそ言葉の指導が必要で、これは幼稚園のみではなかく直りにくいものでございます。言葉の上から、日常生活の態度に小さいながらもある品位を持たせられます様お母様方の細い心くばり、御協力をお願いいたします。